

【自著紹介】

『絵入巻子本 伊曾保物語—翻刻・解題・図版解説—』

ローレンス・マルソー

『絵入巻子本 伊曾保物語—翻刻・解題・図版解説—』
(京都・臨川書店、二〇二一年一月三一日発行。全二九
四頁。税込み価格、一六、五〇〇円。)

<http://www.rinsen.com/linkbooks/ISBN978-4-653-04467-3.htm>

本書は、現存唯一と考えられている『伊曾保物語』の奈良絵本・絵巻を翻刻、図版複製、解題と注釈を加えたものである。目次は、「図版・図版解説」、「翻刻」、「解題」で構成されている。「図版・図版解説」では、全三八図の極彩色の絵を、解説付きで複製している。一七世纪初頭から度重なり刊行・書写された三巻本系『伊曾保物語』には、合計九四の逸話や寓話が収録されているが、巻子本では、そのうち九〇の逸話・寓話が描かれている。図版の特徴として、建造物や人物の装束などがことごとく唐風で描かれている、ということが云える。地中海周辺諸国の国王を初め、さまざまな登場人物が描かれているが、特に伊曾保ことイソップは、特徴的な顔色や容姿の描写で、各画面で目立っている。人物や建造物担当の絵師は、当時の中国を描く絵画様式をよく掻んでいる専門絵師だったと推測できる。図版は、金泥や金箔をふん

だんに施し、屋根の瓦などに紅色、薄緑、紺、空色、土色、黄色を使い分けている。詞書き(本文)は、土金泥下絵の鳥の子紙(雁皮紙・斐紙とも)を用い、一行一六～一八字の余裕を保つた上品な書体で書写されている。巻子本は全六軸で、縦30・3cmで統一されている。長さは、本文・図版合わせて、100・211cmに及ぶ。三八枚の図版のうち五枚が、料紙二枚にわたってのいわゆる「二倍幅」になっている。制作年代については、識語を欠いているので不明であるが、他の奈良絵本・絵巻と比較して、寛文・延宝・天和期(一六六一年～一六八四年)頃の「最盛期」に作成されたと推測できる。注文・購入者は、当時大変な富豪になっていた大名や豪商だつたと想像でき、その家の「お姫様」に与えていた花嫁道具の一部だったかと推測する。

詞書きは、写本・古活字版・整版本の三巻本系『伊曾保物語』と大同小異である。諸本のうち、寛永一六(一六三九)年刊古活字版に最も近いが、それでもかなりの箇所に異同が認められる。例えば伊曾保の主人で「伝記風イソップ物語」(三巻本系の上巻第一から中巻第九までの二九話)に数多く登場する「しゃんと」(天草版で

は、Xantho と書く) という登場人物を、この巻子本では、「しあんと」と統一して表記されている。なお、この巻子本は、古活字本・整版本の分類で分けられている、いわゆる「そのうへ」の「教訓一八条」の系統に属する。

「解題」で述べているが、『伊曾保物語』の祖本が何だったのか、多くの謎に包まれている。一五九三年刊の天草版『エソポのファブ拉斯』(ローマ字綴りで口語体)との関係も充分理解されていない。本書では、一五四六年アントウェルペンで刊行されたスペイン語版との関係について考察しているが、まだ別の本から数話もの逸話や寓話が含まれているところをも認め、その伝本の可能性についても考察している。従来の諸説を踏まえながら、新しい典拠を試みているところもある。

本書は、岩波版日本古典文学大系(森田武校注)『仮名草子集』所収本、『仮名草子集成』所収の諸本(朝倉治彦校)、大塚光信校注本、遠藤潤一校注本、武藤禎夫校注本、『イソップ資料』所収本(吉見孝夫校)と比較しながら読めば、巻子本の性格が分かるよう構成されている。そして、本書の今まで殆ど人目に触れられていない図版の一つ一つが、海外文化受容史を知る重要な手がかりとなると思う。

